虚子記念文学館投句特選句・令和三年二月

稲畑汀子　選

春風や伝統俳句学ばんと　兵庫　武田奈々

よき知らせ受く虚子館の梅ヶ香に　新潟　安原　葉（青少年）

早春や風に色生れ芦屋川　滋賀　礒田ひろみ

西の下は虚子の風景冬夕焼　京都　西村やすし

草青む野に気力得る外出かな　滋賀　石川多歌司

紅梅の散りて一水止まりぬ　大阪　山田佳音

いぬふぐりご免ねと押す車椅子　兵庫　池田雅かず

梅一輪より風匂ふ日の匂ふ　大阪　辻　昌子

その青のさらなる青へ鳥帰る　神奈川　進藤剛至

野焼果て闇深くなる広くなる　兵庫　田村惠津子

入選句・令和三年二月

俳縁を宝としたる賀状かな	兵庫	岩水ひとみ
懐の深き師の庭梅香る	岡山	奥山登志行
疫病まだ去らざるままに寒明けて	兵庫	山本康子
布石までは勝ってるつもり春寒し	兵庫	槌橋眞美
師の庭の梅の日向をめぐりけり	大阪	徳岡美祢子
早春に流れは清し芦屋川	石川	辰巳昌彦
すき焼に水菜シヤキシヤキ歯切れよし	大阪	徳永由起子
白梅に隣る紅梅つぼみ万	兵庫	柄川武子
紅梅の寺庭に虚子の句碑にほふ	京都	杉森大介
六十はまだまだひよこ春立ちぬ	大阪	山下幸典
梅ふふむ出番はあるよ旅鞄	兵庫	森岡喜惠子
白咲いて次はどの梅かと庭に	石川	辰巳葉流
海苔吸ひの椀にひろがる朧かな	神奈川	小堀公美子
猫柳一粒づつの日ざし寄せ	大阪	石橋玲子
虚子館のけふうぐひすに出会はずと	京都	宮本幸子
日脚伸び外へ外へと向く心	大阪	河辺さち子
水の上のうす紅の梅ことさらに	兵庫	西村正子
春立てば虚子館光るものばかり	兵庫	平田　惠
紅梅を見て白梅へ汀子邸	兵庫	黒田千賀子
水音のいつもどこかに濃紅梅	兵庫	藤井啓子
買ふチョコに差をつけバレンタインの日	大阪	西尾浩子
瀬戸内の潮の育てし海苔の艶	兵庫	涌羅由美
薄氷に閉ぢ込めて居る風の音	兵庫	河野ひろみ
二百年土蔵にひそむ余寒かな	奈良	好川忠延
猟名残灯りそめたる峡の村	兵庫	中村恵美
日溜りをぽんと持ち上げ蕗の薹	兵庫	山田佳乃
余寒なほ有れど足音聞こゆ庭	兵庫	小杉伸一路
紅梅の枝の先まで蕾かな	兵庫	入谷千惠子
三寒の家居自粛を解く四温	兵庫	金田八江子
初午の憑依の巫女の湯立かな	兵庫	伊藤秀子
ゆったりと登りながらの梅見かな	兵庫	山岸正子
咲きそめて梅が香広げゆきにけり	大阪	綿谷千世子
峡谷の満天の星いぬふぐり	奈良	芳林淳子
落語会案内状来る梅二月	兵庫	三木雅子
すずめ焼く千本鳥居や午祭	兵庫	大西美知子
街静か豆撒く声の遠きより	兵庫	高市敦之
山裾を廻り道して梅を見に	兵庫	小川孝子
芦屋もう春の日差となつてゐし	兵庫	横山脩子
泊船は帆をたたみけり春の風	兵庫	永沢達明
邂逅に春めく館となりゆける	兵庫	玉手のり子
春立ちぬ天神の絵馬重なりて	神奈川	平野孤舟
親戚を妣と巡りし七種粥	奈良	堀ノ内和夫
葉の縁を白く彩り春の霜	兵庫	高橋純子
早春の色なき森の明るさよ	大阪	大川隆夫
歳時記をめくり春探す雨水かな	兵庫	寺田紗希
バレンタインかさばる袋なつかしむ	兵庫	田崎みるく
雲雀割く碧の向こうに清む緑	兵庫	東　千
清流の瀬を彩るや三葉芹	石川	伊東弥太郎
春の雪波止の一舟明るうす	兵庫	西村みどり
伊予簾様障子の向こう都と故郷	大阪	小髙光琴
涅槃会や来迎待つ間の賑やかさ	東京	拓庵
けふの日を館にひそやか迎春花	兵庫	川村ひろみ
下萌えて四方山話はづむ館	兵庫	深尾真理子
あたたかや虚子生誕祭寿ぎぬ	兵庫	奥田好子
俳磚の角美しき二月来	鳥取	前田　千
桃の花館にぎはひて俳句祭	兵庫	戸田章子
鶯や二羽ゐるといふ夫の耳	兵庫	キートスばんじょうし

窓の外メジロ散りとぶ春の音　兵庫　永廣千瑛子

潮風とともに駆け行く春の土手　京都　溝畠美紗葵

踏みしめていざ行きめやも大試験　兵庫　高木　皐

キャンパスを闊歩するハトうららかに　京都　濵岡利奈

花粉舞う鼻紙必須鼻かゆい　大阪　東　百合子

句を思い映るつわぶき風にゆれ　大阪　東　恵美子

虚子館へ春の道ゆく清き風　香川　大好郁香

銀のしっぽいつ振り向くや猫柳　神奈川　金子三奈乃

春光や空仰ぎ笑む照坊主　東京　宮村士々

椿落つ薄暗がりより白き蝶　埼玉　土井洋子